

勝山伊予柑(かつやまいよかん)

登録番号：第1442号

登録年月日：昭和62年11月12日

登録者：愛媛県温泉青果農業協同組合

(愛媛県松山市湊町8丁目120-1)

育成者：樋口光雄

来歴：「宮内伊予柑」の枝変わり

特性

■栽培特性

樹体の特性は、「宮内伊予柑」とほぼ同様で、結実期までの幼木および高接ぎ樹の生育は良好である。結果し始めると樹姿は開張性となる。枝葉の形質は「宮内伊予柑」と大きな差はなく、結果していない状態で両品種を肉眼で判別することは困難である。

弱い結果母枝には直花が着生しやすく、強い結果母枝には単生または総状の有葉花を着生する。花の形はよく整っており、奇形花の発生はまれである。

「宮内伊予柑」と同様に結果性が良く極めて豊産性である反面、樹勢が弱りやすい。結果過多となって樹勢が著しく衰弱すると花ボケとなり、樹体の回復は困難となるので、深耕、有機物の投与、施肥等の土壌管理は徹底して行い、樹勢の維持強化を第一の目的としたせん定や、摘果等の結果調節を行う必要がある。

施肥基準等を含めた栽培管理は、「宮内伊予柑」に準じた方法で問題ないと思われる。

■果実の特性

果実は「宮内伊予柑」よりも大果の割合が多く、この傾向は特に樹勢の良い若木や高接ぎ後の結実し始めた木で顕著である。

果形は扁円形で玉揃いが良い。果実の最大径が赤道部よりも果頂部に近く、果実の縦断面は台形に近い。「宮内伊予柑」によく見られる腰高果の発生は、非常に少ない。着色の進行は「宮内伊予柑」より5～7日程度早い。完着後の紅の濃さは両者とも同程度である。果皮の粗滑は、「宮内伊予柑」より滑らかである。「大谷伊予柑」ほどではないが、7～8月の幼果の時期においても、「宮内伊予柑」とは肉眼で容易に判別できる程度の差がある。果実の油胞密度は、「宮内伊予柑」よりもやや粗い。

剥皮性は中程度で、手で剥くことができる。収穫直後は果皮が硬いが、予措が効いて果皮が軟らかくなると剥きやすくなる。剥皮時の香気は「宮内伊予柑」と同様である。含核数は少なく、無核果の割合も高い。果実は、「宮内伊予柑」よりも減酸が早く、やや淡泊な食味であるが年末からの出荷が可能である。特に大果はす上がりが発生しやすいため、長期の貯蔵には適さない。1月下旬を過ぎると、食味は「宮内伊予柑」の方が優れる。

■病虫害抵抗性

病虫害抵抗性は「宮内伊予柑」と大差なく、「宮内伊予柑」の防除体系に準ずる。増殖は高接ぎではなく苗木で行い、無毒化後、弱毒ウイルスを接種した苗の導入が望ましい。

■地域適応性

適地条件は、本品種の特性を十分に発揮させるために、「宮内伊予柑」よりさらに厳しい選定基準が必要である。「宮内伊予柑」の産地の中でも、高品質な果実が生産される地域、すなわち排水が良好で耕土が深く、土壌が肥沃で日当りのよい緩傾斜地が望ましい。条件の悪い地域に導入すると着色および減酸の進行が遅れ、特性が発揮されない。また、出荷適期の幅が狭いことから、「宮内伊予柑」よりも高い収益性を見込むのは難しい。平成7年現在、愛媛県下の伊予柑全体(7,139ha)のうち本種の栽培面積は235haである。

(喜多景治)